

2016 年度卒業式 副学長式辞  
～歌は卒業式の翌日生まれる～

副学長 北山修

## 1. 別れの歌

皆様、ご卒業おめでとうございます。何か特別な話ということで、私は歌作りの話をしようと思います。

という私は、精神科医ですが、作詞家でもあります。それで歌はどこで生まれるのかと問われ、それに関わる精神的な話をしてほしいを請われることが多いのです。私は、歌は旅の間で生まれると言うのが、今のところ一番相応しい答えだと思っています。

こういう創造の在り方は珍しいものではないのです。旅するミュージシャンや芸術家が土地土地でパフォーマンスを行い、出会いや別れを繰り返してまた旅に出るという伝統は、俳人や「吟遊詩人」の旅でも見られました。

日本における旅の歌の古典「防人の歌」は、多くが別離や望郷をきっかけにし、愛する「あなた」に向けて生まれたのです。歌は特別な道具は要らないし、口だけで十分に持ち運べるので、便利であり旅に向いているのでしょう。

歌は、絵や小説と比べ、基本的に道具は要らず、口で持ち運ばれるので、旅に便利であり旅に向いているという事実も、また旅するミュージシャンを増やすのです。その心理に関心を持つなら、別離から創造までの間で、分離の痛みを克服すべく歌が生まれていることが分かるのです。

だから歌には、旅に出かける時の別れの歌や、旅人の望郷の歌が増えるのは当然でしょう。歌の内容を見てみますと、会いたいののに会えない、という歌が何と多いことでしょう。それには、呼んでも帰らぬ恋人の喪失や分離の悲しみが歌い込まれています。だから大抵、欧米の別れの歌にしても、防人の歌にしても、意味として悲しみと痛みが歌詞やメロディに織り込まれることが重要なのです。おそらく、痛い痛い、悲しい悲しいと言って気持ちを発散し、メロディに美しさに痛みは癒されているのでしょう。

## 2. 創作時間は朝

私の具体的な旅の話をしましょう。新幹線の中で、歌やエッセイは生まれます。そうではなく、出発はしたけれど行きたいところにまだ行けないという、

この「合間」こそが創造性の点では最適の時間なのです。それで、出かける時は、作曲家から頂戴したメロディを録音したものを持ってゆくことが多いのですが、私がそれを聞きながら夜行列車や夜行バスに揺られていると歌が朝方生まれるのです。

ポール・マッカートニーの名曲「イエスタデイ」も、朝方生まれたと言います。伝わる話では、ある朝彼が目覚めると、頭の中でメロディーが鳴っていたのです。“こんな曲知らないぞ”と思いながら、ベッドのそばに置いてあるピアノでとりあえずメロディーを弾いてみたのがこの曲だったそうです。それは、朝の覚める時に発揮される創造性であり、内から外に向かって発揮されたのです。

このような眠りの国から外の現実への「旅」が、誰にでも毎朝繰り返されているのではないのでしょうか。ここをあつという間に走り抜けている人は、そこに旅のあることすら気づかないかもしれません。旅好きの私だからこそ、夜行列車で目的地に近づく際の独特の状況が、実は家でも毎朝発生する可能性を発見したのです。

朝六時頃、フランツ・カフカの小説『変身』で主人公はばかでかい虫（原書：Ungeziefer）に変身していました。人間が鶴や蛇であったという異類婚姻説話を思い出すなら、それもよくある話なのです。プルーストの小説『失われた時を求めて』の冒頭で語られる、主人公の眠りと覚醒の間は、私よりも狭いようですが、余裕があって、朝寝の中で物が意味を持つ様を描写していきます。

こうして、朝、名曲は、名作は生まれます。

中でも、最大の傑作は『津軽海峡冬景色』です。「上野発の夜行列車」で始まるこの歌も又、朝、青森駅に降り立ったところから始まるのですね。

### 3. 青年期は旅

さて、なぜ旅の歌が人生に合うのかというと、人生そのものが旅だからです。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也

と芭蕉が詠んだ通りです。人生そのものが誕生から死までの旅であり、旅の歌が人生の歌となるのは当然です、こういう現象は洋の東西を問わず、普遍的なものでしょう。

特に、大学の卒業は旅たちの時でした。青年はドイツ語のワンダーフォーゲルを意味する「渡り鳥」をその象徴として使うことは多いのです。白鷗大学の学生なら、本学のシンボルは、校名の「白いカモメ」であって、本学は皆さんがカモメのように高く飛翔するための学力と体力、そしてそのための気力を養

成するための環境でもありました。

これから、皆さんは、ここを出て、また新たな旅に出ます。それは具体的には、卒業旅行であったり、故郷への旅であったり、あるいは就職先への引っ越しの旅であったりするでしょう。今日1日は「さようなら」「さようなら」と何度言われることでしょうか。それにメロディをつけてみてください。夜になればカラオケで、きっと、別れの歌を何度も歌われることでしょうか。既成の歌の歌詞を変えて創作してみたらどうでしょうか。

ただ歌うだけではなく、作詞作曲すれば、生まれて初めての新しい卒業の歌や別れの歌が生まれるかもしれません。

そこで提案です。今日思いついた言葉を書き留めてください。それが、新しい旅の歌、あるいは小説の書き出しになるかもしれません。めったにない、創造の時です。

それは起こるとしたら明日の朝です。期待しております。